

「シニア海外ボランティア」

# 本多 須美子さん

HONDA Sumiko

開発途上国の  
教育現場に立ちたい

「次は体育だ！」

教室を勢いよく飛び出す子どもたち。目を輝かせながら向かう先は校庭。これから待ちに待った体育の授業だ。

中東の国ヨルダンの首都アンマン。約300人が通うズフル第二女子中学校では、体育の授業が一番人気。この日は、みんなが大好きなドッジボールだ。まずは準備運動。それが終わったら、いよいよ試合開始だ。生き生きとボールを投げ合う生徒の姿を見守っているのが本多須美子さん。この中学校で体育を教えているシニア海外ボランティアだ。

## JICA Volunteer Story

PROFILE

長崎県出身。大学卒業後、小学校教員として勤務。退職後、NPO法人アジア女性センターに就職。2011年9月から、シニア海外ボランティア(体育教育)としてヨルダンで活動中。

# 「体育の授業を通じて 子どもたちの成長を後押ししたい」

パレスチナ難民が多く暮らすヨルダンの首都アンマン。シニア海外ボランティアの本多須美子さんは、中学生が楽しみながら“生きる力”を身に付けられるよう、体育の授業改善に取り組んでいる。



九州の小学校で教員を務めていた本多さん。退職後に参加した地域のボランティア活動で、出稼ぎで日本にやってきた女性たちに出会った。開発途上国で暮らす家族を支えるためだという。異国の地で必死に働く彼女を支えたい。本多さんは日本で暮らす外国人女性を支援するNGOに就職し、生活の悩み相談や就職支援などを通じて、貧困や女性への差別という新たな途上国の問題を知る。教員としての経験を生かし、現場で役に立たないかとシニア海外ボランティアへの参加を決めた。

みんなが参加できる  
体育の授業にしたい

そして配属されたのが、ズフル第二女子中学校。この学校、ヨルダンにあるものの、隣国イスラエルとの紛争で故郷を追われたパレスチナ難民が通っている。本多さんは、難民の子どもたちに体育を教えるべくこの地にやってきた。

しかし、いざ体育の授業を見てみると、さまざまな問題が。例えばバスケットボールの授業では、上手な生徒だけが試合に参加し、それ以外はコート脇でパス練習。教員も一部の生徒にばかり指導していた。

これでは本来の体育の授業になっていない。「体格や能力に差がある生徒が協力し、ルールを守り、一緒に後片付けをする。体育は、社会で生きていく上で必要なことを教える場であればなりません」と本多さん。母国を離れて厳しい環境で暮らす難民の子どもたちに、体育を通じて、心を鍛えてほしいという思いもあった。

そこで取り入れたのが、全員が平等に参加できるドッジボールと長縄跳び。生徒の団結力を高めるため、日本での教員時代にも指導経験があった競技だ。まず



a.「リラックスして跳んでみよう!」と、跳び方のコツを指導する本多さん  
b.スマイルカップが終わると後片付け。競技だけでなく、社会のルールも学ぶ  
c.時間が足りないと軽視されていたウオーミングアップも、本多さんの指導できちんと行われるように  
d.現地の教員向けにワークショップを開き、体育教育の目的や授業の進め方などを伝える

は現地の教員とルールや指導方法を共有し、授業に取り入れてもらうことに。さらに、生徒たちが目標を持って取り組めるよう、周辺の8つの小学校で競う対抗戦「スマイルカップ」を企画した。

しかし、本多さんが目指す体育はなかなか浸透しなかった。教員は相変わらず、上手な生徒への指導ばかり。子どもたちにとっても、それが当たり前になっていた。「学校の名誉を守るためにも、スマイルカップでは確実に勝てるようなメンバーを選びたい」と教員の一人に言われてしまうほどだった。

それでも本多さんはあきらめなかった。「ボールをキャッチできなくても、よけるのが得意な子もいる。協力すれば良い結果を出せることを学べるよう、多くの生徒が参加できるようにするべきです」。そう訴え続け、運動が苦手な生徒にも積極的に指導を続けた。

すると、変わり始めたのは生徒たちだった。みんな力を合わせないと勝てないと、空き時間を見つけて練習するようになったのだ。また、以前はボールに当たっても外野に出ない子が多かったが、次第にルールを守って試合ができるようになった。長縄が足りなければ、洗濯用のロープを使って練習し、交替で縄を回すなど協力し合うようになった。



学校対抗のスマイルカップでドッジボールの試合の審判を務める本多さん(右)